総合討論2

足立　太田さんは、社会的な文脈での文化相対主義と異種混交性を検討するとともに、その議論にもとづいて、開発される側がこの文化的な異種混交性を積極的に利用する可能性を示唆されたように思います。この議論が、本日の渡辺さんの示された枠組みや議論、そして第1部の小熊さん、崎山さんの議論などとどのように関わるかについて、ここでまとめる力は私にはありません。むしろ、ここに参加されている方々の自由な討論の中から糸口を探って行きたいと思います。

太田　これまで議論にならなかったことで、一つだけ発言させていただきます。それは開発とジェンダーという問題についてですが、開発についてのディスコース自体がジェンダーによってコード化されているということはあるように思います。私はある研究会でダヤクのエスノグラフィを読んでいたのですが、その中の事例で、ダヤクの女性が木材伐採係として韓国から派遣された人のメイドさんをしていまして、性的なサービスも行うようなメイドさんであった。で、その韓国の男性は、その女性を非常に気に入って結婚してくれといったが、女性はそんなに急だと困る、まず村に戻って一週間位したら戻ってくるから、といって帰っていった。男性は待っていたが女性はもう戻ってこなかったと。これは開発の、今私らが取りあげているテーマからは周縁的な話題かもしれないんですが、実はこういうことも開発の中では重要なことで、しかも私らが今日話さなかった問題だと思います。そういうことは、セクシュアリティの問題と開発というのは全然関係がないようにみえるが、重要なネゴシエーションがそこでは行われているんではないかと思います。これはこれから開発について考えるときに重要な議題ではないかと思います。

足立　確かに、開発とジェンダーに関してはこれまで様々な議論がありますが、開発言説とジェンダー、開発とセクシュアリティーの問題はあまり議論されていないように思います。今後の課題かもしれません。

ところで、渡辺さん、太田さんのお話についてコメントはないですか。相対主義といった場合に、渡辺さんのいわれた相対主義と太田さんの主張している相対主義とはズレがあるのではないかと思ったのですが。

渡辺　私もズレはあると思います。一つには、私の場合は「文化」相対主義ではなく、ただ単に相対主義である。私自身は、開発

をめぐっても、本当に問題なのは文化なのか、ということはどこかで引っかかっているんです。相対主義といった場合も、本当に問題は文化なのか、ということはどこかで引っかかっています。

足立　そこで崎山さんに続けていただきたいんですが。経済のループの話でですね、経済的な話と文化的な話はズレているんだけれども、ある時点で接点をもつという話をされましたが、開発はどうも文化の問題ではないのではないかということを、崎山さんふうに展開していただきたいのですが。

崎山　文化と発展、文化と開発というものを私はループとして表現しましたが、実はそれらはつながっているんじゃなくて、まったく違ったところで常に文化というのは差し挟まれることによって、経済的なある種の方向をもったいい方として出てくる、という話をしたかったんです。つまり文化が本当に問題かどうかということは、すでに最初から欠け落ちていて、差し挟まれる契機でしかなくなってしまっているものとして、あたかもループの結節点のようにみえて出てきます。しかし、実際には、それが発展とか開発とかいう問題構成の中でどういう位置にあるのかはまったく考えられていない、ということをさっき言いたかったのです。

冨山　崎山さんが「文化」という設定をどうしようかということ、あるいは太田さんが最終的にはもう一度文化相対主義というものを捉え返そうという話とは、非常に関わると思うのですが、私はこのように聞いたんですね。渡辺さんが文化を最初にみようと思ったときに、出会ったのがポリティカル・エコノミーの外部という問題、つまりそこには「別の文化」ではなく、いわば、市民の外、もっと言ってしまえばキャピタリズムの外、という問題が絡んでいるわけですね。そして、そういうものを何かしらみようとした。そしてそういうものをみようとしたときに、相対主義というものを設定した。ところが後の文化相対主義という言い方は、さしあたりキャピタリズムはもう前提にした上で、「様々な言葉がある」、「様々な儀礼がある」というレベルになってくる。これはやはり見ているところが違ってきているわけですね。この変遷というのはすごく問題ではなかろうかと思います。

おそらくこの話は、崎山氏が固有性といった話を、まさしくザスーリッチの手紙の問題として、つまりキャピタリズムを乗り越える問題として固有性を設定した、ということとも非常に似ていると思います。ある意味では、文化の外とか、固有の文化という問題ではなく、「キャピタリズムの外」という話として固有性を語ったときには、そういう問題は当然登場してくると。あるいは「市民の外」としてたてた時点で、単にいろんなものがあるよという言い方が許

されなくなってしまう問題があったわけです。一つはそれは、非常に語りやすい文化の語り、あるいは相対主義というものになった。これは語りだけの問題なのか、それとも変化の問題なのかというのはあるわけで、再びそれをフィールドに返したとき、依然として開発を受け入れられてしまう原理をどうするのか。「食っていける」とか、もっといえば欲望の問題ですね。ここを議論しないとまた同じ話になってしまう。

要するに、キャピタリズムの抱える欲望のシステムといった問題として、最初渡辺さんが見ようとした領域というのは、もう一度設定されるべきだと思います。

佐藤　私の興味というのはやはり開発ということであります。そこで開発というものを中心にして考えると、開発する人とされる人の関係性というのが一番みえやすいと思います。これは明らかに、する人とされる人がいるというところから話が始まるんですが、ここに開発という行為があります。今議論になっているのは、そのする人の背景に文化があって、される人の背景にも文化がある。そしてその文化と文化の関係性の中に、たとえば一つオリエンタリズムというものが想定されているから、開発とオリエンタリズムという課題設定がされたのだろうと思います。そして、この文化と文化の関係性を捉える際に、どういうものがあるかということで、本質主義とか相対主義がある。それで、開発に関していえば、経済は常に取り込まれているから絶対的であるという言い方もあれば、こっちの世界には内発的発展論というのがあってという言い方もある。問題は、これらの様々な関係性同士が、この場で、ごっちゃに話されているから混乱しているのではないか。私としては、議論をどこかの関係性やレベルに区切る必要があると思う。つまり、開発する人とされる人の関係性というものを軸において、どのようそれ以外の関係性なりが関わっているのかという様に議論すべきではないか。

栗本　太田さんに対して質問があります。バーバのサイード批判のところで、教化の対象として語りかけるというのと、「神聖な文化を担う人」というイメージの投影という二つの側面があるとおっしゃったが、開発というと、一元的なIMFのような開発・発展のモデルと、内発的・自生的発展のモデルとはパラレルだと思うんですね。つまり、自生的発展のモデルというのは、土着の中にもいいものがあるというか、固有の論理を見つけだしていって、それにもとづいて開発をすると。私はそのように受け取ったんですが、そのように受け取っていいのかということが一つ。

さらに、異種混合というものを具体的にイメージできなかったんですが、その二つの開発・発展のモデルについて、異種混合

というのはいったいどのように考えられるのかをお伺いしたい。

太田　一つ目の質問に対しては、イエスです。

足立　二つめの質問に関してはどうでしょうか。つまり、近代化論的な開発（「普遍」）と、内的な発展論（「固有」）、そういう二つの発展・開発概念があるわけです。内発的発展論なんかはある種のオリエンタリズムだと思います。そこで、そういう二つのものに対して、太田さんのいう文化相対主義に対する alternative としてのハイブリディティという概念がどう関わってくるか、ということではないかと思うのですが。

太田　内発的発展論というのは、オリエンタリズムの裏返しとしてのネイティヴィズムです。ですから内的発展論というのは図式的にも非常に誤っている概念だと思う。先ほど資本主義の話が出ましたが、メキシコにガルシア・カンクリーニという理論家がいて、その人は資本主義に取り込まれた社会内部における文化の多様性というのはいかにして発生するのか、という問題を取り扱っている。モデル自体はそれほど難しくないモデルで、キャピタリズムというのはあまねく浸透していると言うことを言っています。しかしその浸透に対して、それを受け取る側の消費のプロセスというのは必ずしも限定されていない。先ほどのキャピタリズムの問題と、創造的な誤読としての、「消費としての生産」とか「生産としての消費」といった路線で考えていくと、オリエンタリズム対ネイティヴィズムといった二項対立の本質主義ではない形の見方ができるのかもしれない。ということは、同じようなモデルを使って、近代化論的開発論対内発的発展論というモデルを乗り越えることは可能かもしれません。

小熊　文化相対主義に関してなのですが、文化相対主義という概念は、政治・経済から切り離した文化というものが存在するということを前提としているのではないでしょうか。近代が政教分離から始まったとすれば、つまり文化と政治・経済を切り離すというところから始まったとすれば、その前提、その市民の論理を疑わないところから文化相対主義という考えは出てくるわけです。政治・経済を抜きにした文化ならいくらでも相対的に楽しんでよろしいと。そういうところで文化相対主義は出てきたのではないか。ところが一旦フィールドに出てみると、やはり文化と政治・経済がごちゃごちゃに混じり合ったポリティカル・エコノミーの状態に直面せざるを得ず、このとき文化相対主義は通用しなくなってしまう。内発的発展というものも実は、文化の重点、文化のエッセンシャリズムを掲げながら結局のところ開発のところを混ぜ合わせた形で内発的発展を語らざるを得ない。そこのところは区別されないままごちゃご

ちゃになっているのが現状であって、区別して語ろうとするところにこの限界が出てくるのではないか。

現実に文化相対主義が限界に突き当たる例として、フィンケルクロートの議論で出てくるのは、文化と法の思想といった境界領域です。たとえばフランスに移民が入ってきたときに、彼らの一夫多妻制や割礼が文化として認められるか、といった問題がでてくるが、その時に文化相対主義は通用しなくなる、という状況がある。あるいは共有財産制というのは文化なのか一種の経済システムなのか。それを破壊して経済をもう一度組み立て直すということはできるのか、といったところに限界があるのではないか。

中村　もう少し現実の問題に関してお話しさせて下さい。

マリの例でいくと、たとえば識字率は非常に低い。これを上げないことには国民国家になれないという国是があって、マリのみならず、２０世紀までには literacy を向上させようと、国際機関も旗を振っています。しかし、マリでは８０年代半ばには就学率が下がっている。田舎のお百姓さんは、家族のうち一人が学校に行ければいい、あとの人は行かなくてよいのだといっており、このような状況を表すために family literacy という言葉もあります。

今日、computer literacy という言葉が比喩的に使われますが、あれ自体まさに group literacy ですね。ノートや鉛筆は壊れませんが、コンピュータは壊れるわけで、そういう場合コンピューターに詳しい技官が一人いないと、誰もフォローできない。だから、そういう観点からいくと literacy も一枚岩ではなく、family literacy もいいのではないかという議論も成り立つ。この意味で、国が旗を振っているにも関わらず、「衣食／読み書き足りて市民となる」というようには、必ずしもアフリカの現実は向かっていない。とりわけこの傾向は農村部に見られる。

これに対して、マリの都市部では少し異なってきています。市民、都市住民のなかでは、もう公教育は勘弁してくれという意見がありますが、かといってプライベートの学校に行くような金もない。そこで失業している先生を雇って自分たちで学校を作るという動きが出てきているわけです。これまでは、イスラムとの接触や、ヨーロッパの奴隷貿易との接触といった、アフリカの歴史のなかで、文字文化とずっと接触していながら、自分たちから文字を得るという意識が民衆にはなかった。植民地国家が旗を振っても独立国民国家が旗を振ってもそのような意識はなかった。しかし、ついに最近は自分たちから文字が欲しいといっている人々が一部出てきた。つまり一部では、「衣食、あと読み書きができて市民

となる」という発想が仕込まれた人々が出てきた。村のほうではそんなものはいらないという人たちが出てきているのですが。

こうなると、渡辺さんのおっしゃった「衣食足りて市民となる」というのは、マリではこじれてきている。こういうところで文化とポリティカル・エコノミーとの接点というのは、非常に深刻な問題としてあるんです。５０年代、６０年代には、人的資源開発といって、識字率４０％になったら経済的な take off が起こるといっていたが、全然そんなことはなく、literacy というのは何をもってするのかもよくわからなかった。

ただし大まかに眺めると、ブラック・アフリカと南アジアでは識字率は低く、その他の地域はだいたいうまくいっている、というのが世界的な見方であり、この意味で、「市民モデル」が通用するかどうかという物差しは、地域的な多様性、とくにネガティヴな多様性を見るのにはよいかとも思います。

田中　ところで開発を考えるときに重要な点は、開発する側と開発される側の関係には二つの次元があることです。一つは文化相対主義的な次元で、もう一つは絶対主義的な次元で、これらの次元を支えているのは支配・被支配の関係であり、その使い分けを保証する力がそこに働いている。先ほど述べましたが、支配関係の方は非常にややこしくなっています。そしてここで重要なことは、「する人」の側の文化というのはむしろみえないもの（不可視）となっている点であります。つまり語られる対象にすらなっていないんじゃないか。それがなぜそうであるのかというのは、それはやはり「普遍」（絶対主義的）であるということだと思います。それに対して「される人」の側というのは、普遍への道のどこかに位置していても、「する人」からはやはり異質のものであるという意味で、それは特殊であり、それを保証しているのは文化なんだ、というふうにされます。そしてこっちの文化の方は研究され、説明され、様々な用語が準備されているわけです。

そこで小熊さんの話に結びつけますと、女子割礼のように残酷であると思われているような手術といったものを、文化だから認めましょうというのか、それは残酷だからやめましょうというのか、これは難しい。というのは、この対立は政治・経済と文化の対立といえるのですが、実はそれほど単純に区別できる領域ではないわけです。文化という領域そのものが、近代的な産物なわけですから。特に政治・経済と文化との相違、区別をあやふやにするものは、やはり衛生の領域と、宗教だと思います。宗教というのは全然政治とは別だと思っているが実はそうではないし、また衛生についても、それは文化的なレベルで捉えられる場

合もあれば、政治・経済的なレベルで捉えられる場合もある。その辺でやはり常に、境界をどこに設定するか、ということで力のかけひきというか、交渉があるのではないでしょうか。

足立　田中さんが言われるような文化相対主義の具体的な現れと力との相関なんですが、オーストラリアでは、白豪主義に代わって文化多元主義を取り入れてきたといわれています。しかし、それは食べ物といった周辺的なものに対しては文化多元主義なんですが、他方、根幹の政治、それはウェストミンスター制の民主主義システムと法律ですが、それらは絶対化する。それからはずれることは絶対にあり得ないという状況にあるようです。とすると、この国での先住民の状況というのはこれまでの議論をふまえるとどのように理解できるのでしょうか。

窪田　政治・経済というときに、いわゆる「される側」にも政治・経済の論理はあるのかということだと思います。オーストラリアでは「開発する側」の政治・経済しか考えられていない。アボリジニーでも気がつかない間に civilize されてしまったというところがあります。彼らの文化を尊重するようでありながら、完全にそうした政治・経済については無視されている現状がある。

小熊　それはこういうことではないでしょうか。文化相対主義とはいいますが、文明相対主義とはいわないわけでして、文化というのはあらかじめ政治や経済をきりはなしたかたちで限定しているところが大きいと思います。植民学に関していえば、彼らは開発、土地を開くということに関して、文化とは切り離して考えられると思っていた。彼らは文化を尊重するということをいったわけですから、開発しながら文化というのは破壊せずにすむとみなしていたわけです。ではなぜそれが侵略となってしまったのか。いろんな問題があると思いますが根本的な問題の一つは、私は今よりも１００年前、あるいは５０年前は、被植民国の側には、文化と政治・経済が未分化の状態で強く存在していたということがある。ですから、結局文化も破壊せざるを得なかったと思います。この分化／未分化という問題の重要性を痛感しています。

冨山　政教分離というのは聞こえはいいが、やはりもう少し語る必要がある。つまり、文化がなぜ独自に語れるようになったのか、やはり渡辺さんのお話の中に市民という言葉が出ていて、市民社会という問題があるわけですね。この辺は花田さんの方に聞きたい問題なんですが、オーソドックスな発想として、市民社会というのはまず、独自な社会、つまり国家とも政治とも分離した、独自の民族の生活という設定があるわけですね。それこそはキャピタリズムであるし、

そうであるがゆえにキャピタリズムは国境を越え、空間を超える。つまり、政教分離というのは、市民社会の成立という問題だと思います。

もしそういう論点でたてるとするなら、そのプロセスで、文化の領域があるとするのは、あるいは文化相対主義というのは、まさしくその学自身が、市民社会の産物であると、そのようにたてられるかもしれない。そしてこうした文化相対主義を捉えかえすというのはやはり、自分たちの依って立っている市民社会をどう理解するのかという問題とかかわっている。そこでは国家は介入しなくてはならない、市民社会は独自に動かないというのが一つポイントであるし、市場経済も必ずハビタスと絡まざるを得ないという主張が登場してくるわけです。

花田　これまでの議論を伺っていますと、西欧市民社会として表象されているものがどうも違うような気がいたします。アダム・スミス的な市民社会、つまり自由と平等に立脚した諸個人がつながりあって形成している社会が、資本主義社会に転変していく、そこで自由と平等こそが経済的には私的所有と市場における自由競争に転化し、市民的自由と平等を解体していく、そのように捉えられているとしたら、やはり、問題があるような気がします。日本における市民社会論、とくに内田義彦的な表象はそのようになりかねないのではないかというような気がしているだけになおさらです。ただ、日本の戦後の議論においては、市民社会的なものの欠如、簡単にいってしまうと軍事封建的なものから市民社会形成を経験せずにぎらぎらの資本主義に直結してしまった、そこに問題があるのではないか、というような仕掛けがとられており、それはそういうだけの正当な根拠はあったかと思います。しかし、だからといって、西欧型の市民社会を作ろうという戦略が有効性を持つとはいえないし、事実、日本はそのような道をとってはいない。にもかかわらず、日本という国はこれだけ「豊かな国」になってしまった。逆に、市民社会の見本とされるようなイギリスやフランスの国内で問題になっているのは貧困です。

しかし、市民社会というものは、実はそこに政治や暴力を内包しているのであって、そこのところを見ていかなければならないだろうと思います。市民社会とは「市民」、自立し社会性を帯びた諸個人が形成する社会であり、当然そのなかでコンフリクトは不断に発生する。まさにそれこそが社会の原動力なのであって、それを制御、あるいは統制するルールや規範が市民社会的なものではないでしょうか。発展において、西欧市民社会がモデル足りうるかどうか、有効性を持ちうるのか、という点もこの点の反省を踏まえて検討されなければならない

と考えます。

そこから、経済学に立ち戻ってみます。文化相対主義といわれましたが、経済学の中でも、新古典派経済学においては、彼らの体系の中には歴史はなくしかも主人公は合理的個人ですので、そのような問題が入ってくる余地はない。マルクス経済学においても、いわゆる正統派においては、文化は上部構造の問題ですから、切れていて当然ということになります。いわゆる経済学というのは、資本主義が成立し、しかもその限りにおいて、経済的世界、なにか統一的な経済空間みたいなものをイメージし、そこに政治やあるいは政治主義的なロジックなりディスコースなりがくっつけられるという構造になっていると思います。だから、新古典派においては、この極端な例においては、経済合理性の貫徹する社会を阻害する要因として政治がおかれることになります。あまり引用しても意味がないかもしれませんが、マルクス経済学においては、国家独占資本主義という形で無理やりくっつけるということになります。しかも、この両者においては資本主義一般のようなものを想定する点においては極めて類似しております。

私は、そうではないんだと考えております。低開発国をご覧になっておられる方にとっては当然のことかもしれませんが、資本主義国といっても極めて多様なわけです。同じ進んだ国々のなかでもいろいろな違いがある。制度的比較分析などをしてみますとはっきりしてきます。問題はその多様性を析出すると同時に、それぞれの体制の持続性（viability）と転換の要因を見ていくことですから、その多様性の背後にあるなにかイディオシンクラティック（idiosyncratic）なもの、その国や地域に固有なものを見ていかなくてはならないんですね。そうでないと経済的な機構そのものが解けないんだ、ということです。だからマルクス主義の中に厳然としてなお残っている資本の文明化作用といって終わってしまうような雑駁な議論はもはやありえないと思っています。

とはいうものの、だから外からの政策はありえないんだということではなくて、とられる政策というのはあるだろうと考えております。

戦後、マーシャルプランというものがありましたが、その時に打ち出してきたものはなにかといいますと、ある種の理想化されたモデルみたいなものをつくりたいと考えて次々と開発・発展政策を進めたわけですね。しかし、すくなくとも、単に支配・従属関係をつくろうと思ってやってきたとは思えないような金の出し方をしているんですね。アメリカ合衆国が理想とするような世界観をもってやってくる。それ自身が当然、うまく行く面もあるし、行かない面

もあります。それがどうなっているのかということを経済学の側から見ていかなければならないし、そこのところの機制を明確にしていくことが重要です。少しジャーゴンを使って言い換えますと、歴史的な進化のトラジェクトリー（trajectory）における散逸構造のなかでのパース・デペンデンシー(Path Dependency 経路依存効果)に注目し、初発の諸条件が発展の進路を決定していくうえではたす決定的に重要な要素たりうるという点を大事にしそれを解いていくということです。そうすることで、成長と発展におけるいろいろな国民的軌跡の多様性のもつ意味が見えてくる。その中に、文化なり歴史的な規定要因なりが入ってくるわけで、その限りで、ハビタスというものもいれてこないと見えないんですね。先ほど出された塩沢由典さんや中岡哲郎さんの技術革新の社会システムといった議論も同じ問題意識に基づいているはずです。

冨山 レギュラシオンで一番聞きたいのは、たとえば市民化を文化の問題として考えてみたとき、そこに調整の問題をどうたてるのかという点です。つまり、地域的固有性とは何かということとも関わる問題でしょうが、遅れているが故に強制的に調整をやらざるを得ないということを相対主義的に文化的共同体の問題といってしまうのか。崎山氏がザスーリッチの手紙としていた問題とも関わりますが、その辺はレギュラシオンとしては、どうなのか。

花田 そのあたりについては、レギュラシオン理論に基づく研究者の間でも議論のあるところだし、定説があるわけでもありません。ただ、先にも述べましたように、従属理論をレギュラシオン理論が批判するとき、いわゆる従属国内部の諸事情というものを重視していく事が提起されます。そのうえで国際体制への参入様式が、接合様式といってもいいのですが解明されなければならない。リピエッツ等は地域のもつ固有性にかなりこだわりながら論を立てているようですが。

それぞれの国のある段階での開発を見据えて、そこである地域に固有の安定的なメカニズムを見いだし（あるいはそれがいかに存在しないのかを検討し）、そしてそれがいかに危機に転化していくのか、というのが問題の出発点であるわけです。これを経済学的な側面からいうと、剰余の生産と分配の形態（蓄積体制）と、それをめぐる社会的諸アクターの織りなす関係（調整様式）、それらがいかに形成されるのかを見ていくというふうになるものと思います。

そのうえで、段階というと語弊がありますが、ある時期の、ある空間の固有性というものを検出していく。開発経済の場合には、それと中心との関係、あるいは中心と周辺という図式の有効性も含めて、がいやおうなく問題になってきますので、それを

解いていかなければならないわけです。

もう一点付け加えさせていただくと、このように経済的な問題にしたとき、人間は生産者であると同時に消費者であるということが重要になってきます。資本主義経済、市場経済といったとき、そこに登場してくる人間というのは需要を引き受けていく存在であり、そのようなものとして資本主義社会のメカニズムに統合されていきます。たとえば、賃労働者というときには、この主体はもはや資本主義的な商品経済から切れたアウタルキーな生活様式はとれないわけです。賃金労働を通して資本主義的な機構に組み込まれているだけではなくて、消費＝生活様式もまた資本主義的な機制に統合されざるを得ないわけです。そして、それがまた成長の原動力になっていくのですね。資本主義がさまざまな発現様式をとるだけに、生産と消費との両面をにらみ込んだ分析も多様な観察を生み出して当然なのです。ところが、先進国のモデルそのものを、先程の言い方でいきますと市民社会モデルを、開発するときに強制しきれないわけです。西側世界あるいは北側世界といってもいいかもしれませんが、強制しきれないし、今日においても、開発される国の側で整合的な社会形成を遂げているかというとそうでもないのですね。それは、それぞれの地域の政治的な理由であるのかも知れないし、植民地政策の遺産であるのかもしれないし、あるいはそれ以外の要素でもあるかもしれません。

崎山　開発する／されるという関係の中で、される側が生産と消費を引き受ける人間に変わる／変わらないの決定的な要因のところで、文化相対主義が機能しなくなってしまうようなぎりぎりの問題として、どのように問題が構成されるのでしょうか。というのは、それが開発と相対主義の接点であるし、主体であろう市民が登場してくるところの交差点のように思うからです。そこで、ただ労働するだけではなく、ハビタスという言い方をされていましたが、それこそ身体のレベルで感じてしまうようなファクターを入れていくメカニズムというか、他者関係としてのメカニズムがどうなのかを私は知りたいんです。

花田　それは恐らく、ミクロの問題ですね。私は、マクロ経済的観点から発言しようとし、さらにそれに必要なかぎりでミクロ経済的要素を見るのに必要な概念を語ったつもりです。崎山さんの指摘は、ミクロレベルでの個別的諸主体の行動なり関係行為の問題だと思います。私自身が、ミクロとマクロとを切断するのではなくて、整合的一総体として理解するというのに気を取られすぎていたため、ご指摘の点をおろそかにしていたのかもしれません。

ただ、これにお答えするには対象となる世界における経験が必要です。それがなけ

れば、とんでもない空中戦をするか、意味のない抽象論議をするかのどちらかに陥ることは必定です。そこで、これは私の今後の課題として受けとめさせていただくことにしたいわけですが、プロブレマティークだけ一言二言触れさせていただきます。

さしあたり、二点あります。一つ目に関して、関係性の問題とは、貨幣関係とその生成構造の問題圏だということです。これについては、ルネ・ジラール等を援用する形でいくつも議論がありますので、ご存じかと思います。ただ、これを開発過程における社会変容のなかに位置づけて、諸個体の関係形成をどのように分析していくかということになると、かなり厄介なことになるのではないかと思います。

もう一つは、組織のおける諸個体の行動に関する認知論的アプローチでしょう。新古典派であれば、ゲームの理論を用いての分析がなされている領域です。ただ私はそうした仕事には納得していません。つまり、効用極大化であるとか利潤最大化であるとかの仮定を捨てきれていないからです。そこで、合理的個人という枠組みを取っ払う必要があるのです。組織や制度のなかで個人と集団が形成するルールや規範、コンベンション（Convention）の意味を検討し、ついで、それらと個人の関係を解いていくということです。もちろんこの個体は、それらを形成すると同時にそれらに規定される関係にあるわけですから、個的主体の認知が問題になってくるわけです。このようなアプローチからは、企業とか生産組織といった産業組織に関してはかなりの仕事が出てきていますが、そうではないところでの経済学からの分析、とりわけ開発過程における場合ということになると手付かずかもしれません。

さらに、そこにソシエタルなものというかハビタスというか、そうしたものを入れてくることによって、社会と経済の形成を考えようというわけです。答えの出る話ではないのですが、このあたりから攻められるのではないかな、と感じております。

吉川　この研究会での議論には、極端にいえば開発はネガティヴだというイメージが最初からある。しかし、それは現実を考える上でネガティヴにだけとらえられない。

そこで現実の開発を考える上での一つの問題は、国民国家というものだと思います。とりあえずばらばらな個人、部族、違う民族を一つにまとめる推進力が非常に強い。そして、それらを国民というものに作り上げていくプロセスで用いられる露骨な手段が、社会開発と経済開発である。経済がなければ教育づくり、国語づくりはできないと言う意味で、政策上ワンセットをなしている。それらは分けられない。

ところで、これまでの議論では、開発する人／される人の両方を内包して国民国家

とするというよりも、する人とされる人の民族・文化背景が違うというような、異民族支配の開発として安易にとらえているような印象を受ける。

フィリピンでは植民地国家づくりの頃は、国民国家づくりではなく、植民地経営をいかに安定させるかという目的で開発がなされていた。戦後は国民国家づくりと、反共政府のための開発が集中的になされた。こうした開発に対して少数民族は文化の問題をたてて抗議し、異議を申し立てたあと、文化は自治区の精神に収斂された。しかしインフラとか農地改革、道路といったものは、拒否されたわけではなく、むしろマイノリティの人々が要求するものとなっている。なぜなら彼らは文化が違うからといって、国民国家としての恩恵を受けないよりむしろ、その恩恵としての開発資金をもっとくれと主張しています。それと並行して、文化もそのまま保存して欲しいという要求ははっきりと出ている。

足立　おっしゃることはよくわかります。ただ、この研究会は今言われたような開発の見方、語り方でないものをどのように設定できるか、ということが主眼なので、その点をご了解いただきたいと思います。

いずれにしても、色々な議論があると思いますが、本日はバングラデシュで長い間シャプラニールという開発運動をされてきた大橋さんに来て頂いております。実践者の立場から、ご意見を伺いたいのですが。

大橋　これまでの議論は、次の alternative なモデルみたいなものを、文化が作り上げるか作り上げないかということに終始しているように思います。文化がそのような力強いものであると願いたいけれども、しかし現実はそのような問題を超えており、ありとあらゆるところに開発は染み込んでいる。

例えば、バングラデシュの開発は、経済中心であったりテクノクラート中心であったりして、非常に西洋的な概念を中心に行われてきました。その結果、それぞれの固有の文化が押しつぶされてしまい、かえって開発のもたらす「合理性」自身が問題をもたらしている。一番いい例は、近代的な潅漑システムを導入したことで、土着のシステムが崩れ、結局それを使えなくなってしまったことである。そのため、そこでの社会学者や人類学者の役割というのは、そういうものをどう生かしていくのか、というところが今の考え方である。バングラデシュで有名なグラミン・バンクというものがありますが、近代的な金融制度の考え方では、土地なしの貧乏人にお金を貸すことはできないのに、それを行っている。つまり、「合理的」なものとは別の発想転換がおこっている。また、たとえばトラディショナル・バーサペンダントみたいなもののほうが、近代医療制度をもってくるよりも、

よほど乳幼児死亡率を下げるじゃないかといった問題。それから、やはり人類学に期待されているのは、栄養学的に見た家族内部での食事分配の問題であります。というのは、家族全体では栄養学的に充分な食糧供給がなされていても、実は家族の内部でばらつきがあり、十分でない者が出ているからです。

つまり、このような研究と実践の積み重ねがないと、開発の全体像がみえてこないのではないか。今日のみなさんのお話を伺っていて、逆に、具体的なものからしか全体像が結べないのではないかとより強く思いました。

私はNGOでバングラデシュに行っていて、結局は、彼らに、「あなた達は貧乏だから開発しなさい」と教えているなという実感はあるわけです。しかし、だからやめればいいという問題ではなく、開発が現実に止められたら、もっと矛盾を生み出してくる。その矛盾をどう解消するのか、というのがNGOの役割だと思います。また人類学、社会学の役割というのは、現地の声なき人、弱者の声をどう大きく表現していくかということです。そして、その中で、近代農業の「合理性」ではなくミックス・クロピングなどの別の「合理性」を明らかにし、生産の増大ではなく危険の分散という形での「合理性」という議論を持ち上げていくことから、開発を深めていくしかないと思っています。

足立　今の実践というのが、太田さんのいう異種混交という話とつながるのではないのでしょうか。

池田　人類学や歴史学から見れば、文化というものはエッセンシャルなものとしてみてはいけないということですね。それはオリエンタリズムであると。しかし開発を実際にやっている観点からすれば、やはり基本的に文化はエッセンシャルな実体なんです。大橋さんが前提としている文化は、文化を理解し、操作できるようなものである。それから、それを行う専門家が存在する。さらに文化にはいい文化と悪い文化があって、エッセンシャリズムの操作する立場からすれば悪い文化はなくなってほしいし、いい文化はそのまま残ってほしいんだと。開発のディスコースの中で、文化概念がソフィスティケイトされた形で出てきたのは、エッセンシャリズムの本質があって、その中でエッセンシャリズムがさらに洗練されていったということがあるのではないか。

太田　異種混交という議論のなかで言うと、やはり文化と経済を切り離さず、経済的な状況下ではある種の消費を迫られる。消費すること自体が新たな意味、文化へとつながる。これは中米の研究でも、ポピュラー・カルチャーの研究でも言えることである。だから経済と文化とは切り離さない方が有効である。なぜそこを切ってしまうとだめ

かというと、そこを切っていくことによってエッセンシャリズムが発生し、あなた達のいうような国際ロジックを向こうでもっているから、という議論に成り下がることは回避せねばならない。

足立　問題点、いろいろなテーマが出たと思います。どうも今日はありがとうございました。